西夏と黒河流域

佐藤貴保（大阪大学大学院文学研究科特任研究員）

0．はじめに

11 世紀から 13 世紀初頭にかけての黒河流域を支配したのは、チベット系タングート族が今日の寧夏回族自治区銀川市に都を置いた西夏という国であった。西夏の歴史は文献情報が少ないうえに、複雑で難解な西夏語の文献を解読する必要がある。本稿では西夏支配時代の黒河流域はどのような状況であったのか、そして西夏における黒河流域はどのような位置づけであったのかを、わずかに残る文献情報から明らかにしていきたい。

1．西夏の黒河流域進出

タングート族のもともとの根拠地は、寧夏地方でも、黒河流域でもない。中国の文献によると、6 世紀ごろのタングート族は現在の四川省北西部から青海省東部にかけての黄河上流域で主に遊牧を営んでいたらしい。彼らは 7 ～ 8 世紀に現在の陝西省北部からオルドスにかけての地域にいくつかの部族に分かれて移住し、唐朝の保護を受けた。9 世紀後半に唐朝で黄巣の乱が起こった際、オルドス南部の夏州付近（今の内蒙古自治区烏審旗南部）にいたタングート族平夏部族長拓跋思恭が反乱の鎮圧に活躍した。唐朝はこの活躍の見返りとして、彼に唐の皇帝と同じ李の姓を与え、本拠地オルドス南部地域で兵権を自由に行使できる「定難軍節度使」に任命した。唐朝はまもなく滅亡し、オルドス南部は事実上半独立国の状態となった。10 世紀後半に中国を再統一した北宋は、オルドス南部の実効支配を回復しようとしたが、これに反発した平夏部の李継遷（在位：982~1004 年）は 982 年、北宋に対する武力闘争を開始する一方、北方の遼（契丹）朝に臣下の礼をとり、北宋の北辺を共同で圧迫した。李継遷はオルドス南部に散在するタングート諸部族のいくつかを味方につけ、1002 年頃には霊州（今の寧夏回族自治区霊武県）を占領し、寧夏地方への進出を果たした[1]。

継遷のあとを継いだ子の徳明(在位：1004~1031 年)は、本拠地を夏州から興慶府（中興府とも呼ばれる。今の銀川）移し、東の北宋と講和を結ぶ一方、1008 年からは河西回廊(今の甘粛省西部)への進出に着手した。当時、河西回廊にはいくつかの政治勢力が割拠していた。

---

[1] 李継遷の霊州進出以前のタングート族の動向の詳細な研究には、岡崎精郎や岩崎力の研究がある。なお、北宋や遼には李継遷の勢力にくみしないタングート族が多数おり、特に陝西北部にいたタングート諸部族は北宋側の重要な兵力(蕃兵)となった。一方、李継遷の勢力に加わったのは、タングート族だけでなく、漢族も多数含まれていた。西夏はその前身の李継遷の時代から多民族国家だったのである。

涼州（今の武威）にはチベット族、甘州（今の張掖）・粛州（今の酒泉）にはウイグル族（いわゆる甘州ウイグル王国）、そして瓜州（今の安西）・沙州（今の敦煌）には漢族の政権（いわゆる帰義軍政権）が樹立されていたのである。当初李徳明は河西回廊の東端に位置する涼州の攻略を第一目標としていたが、涼州側の激しい抵抗にあい、鉾先を西の甘州に向けた。甘州への侵入路は、賀蘭山を北へ迂回してエチナを経由し、黒河沿いに南下したものと考えられている。甘州は北の遼も獲得を狙って兵を進めており、たちまち争奪戦となった。最終的に李徳明側が甘州を攻め落としたのは1028年のことであった。なお、涼州を占領するのはそれより遅れて 1031 年ごろのことである。徳明のあとを継いだ李元昊(在位：1031~1048 年)は、西方への遠征を続け、1036 年には粛州と瓜州を支配下に収めた。さらに西の沙州を支配下に収めたのは11世紀後半と考えられている[2]。

粛州を占拠した李元昊は1038年、北宋皇帝に書簡を送り、自らを「大夏皇帝」と名乗って独立を宣言した。一般には、この事件をもって西夏の建国とみなされている。この後、西夏は北宋と激しい戦闘を繰り広げ、劣勢に立たされた北宋は西夏に貢物（いわゆる歳幣。具体的には絹と銀と茶）を贈る条件で講和を結んだ（1044年、慶暦の和約）。こうして西夏は現在の寧夏・甘粛地方を中心とする地域を、1227年にモンゴル帝国に降伏するまで、約二百年にわたり支配することになる。この間西夏では、漢字をもとにした独自の西夏文字が創製されたほか、仏教・儒教文化が栄えた。銀川郊外の西夏王陵をはじめ、各地に残る遺跡が、西夏の繁栄ぶりを今に伝えている。

2．西夏の黒河流域支配

（1）黒河流域と中継貿易

寧夏・甘粛地方を根拠地とした政権は歴史上いくつか存在する。しかし、約二百年にわたって独立を保ち、なおかつ東の大国北宋に貢物を贈らせるほどの脅威を与えた政権は、西夏が唯一といってよい。12 世紀前半には金朝の華北進出により、北方の遼・東方の北宋という二大勢力が相次いで倒れたが、西夏だけは支配地域を拡大して独立を守った。西夏が長期にわたり独立を維持できた要因を探る研究はこれまでにも多くの研究者によって行われており、隣国の北宋・遼（12 世紀後半からは南宋・金）と互いに牽制し合いながら、巧みな外交手腕で他国の侵入を防いだこと、馬産地を支配下に収めて強力な騎馬軍団を形成していたこと、タングート族のみならず、漢族などの様々な民族を官僚として登用したこと、大陸の東西を結ぶ交通路（いわゆるシルクロード）の重要なルートである河西回廊を確保したことによって、中継貿易の利益をあげていたこと、などが指摘されている[3]。

筆者はいずれの説も政権が長く維持された要因の一つとして考えているが、その中でも特に注目しているのは貿易の利益である。西夏は北宋や遼・金朝との貿易を積極的に行なって、自国で産出する畜類(特に馬)や畜産品・薬草、それに西方から運ばれてくる宝石など

---

[2] 李徳明・李元昊時代の河西回廊進出については、長澤和俊による一連の研究がある。
[3] ［宮崎 1935］［李蔚 1985］［陳 1991］参照。

を東へ運び、その引き換えに絹織物や茶・陶磁器を手に入れ、一部は西方へ転売していたとみられる。貿易は、国境付近に設置された貿易場での取引のほか、北宋・遼・金朝の都へ使節を派遣して行なわれた。例えば北宋の龔鼎臣の随筆『東原録』によると、1062年の正月に北宋へ派遣された西夏の使者は、北宋の都開封で安息香・玉・金精石（ラピスラズリ）や硇（硇）砂（塩化アンモニウム）・琥珀・甘草を売り出したという[4]。これらの物産のうち、西夏国内で産出すると推定されるものは甘草だけであり、それ以外は西夏の支配地域よりも西方の所産である。12世紀後半に華北を支配した金朝も、印璽の材料に用いる玉を得るため西夏へ使者を送っている[5]。玉の産地はコータンであろう。こうした記述から、西夏が東西交通路上の中継貿易を行なっていたことをうかがい知ることができる。西方の物産は黒河流域を経由して西夏に入り、それが北宋や遼・金にもたらされたに違いない。こうした貿易の利益を享受していたのは商人だけではない。西夏が北宋・遼・金朝の都で行なう貿易は西夏皇帝が派遣した使節団によって行なわれた。使節団には商人のほか、皇帝の側近集団、政権を構成する様々な民族・部族の官僚が含まれていた[6]。貿易の利益は皇帝をはじめとする西夏の支配者階級にももたらされていたのである。また、東方から輸入された茶は、西夏では武功を挙げた者や業績の優秀な官僚に対する恩賞として支給されていた形跡がある。

そしてカラホト遺跡から大量に発見されている仏典や中国の古典の西夏語訳（刊本が多数発見されている）など、旧西夏領の各地に残されている遺跡・文物は、西夏が諸外国の文化を積極的に吸収していたことを雄弁に物語っている[7]。諸外国の文化を吸収し、中継貿易の利益をあげるためには、その交通路にあたる河西回廊の支配は必須の条件であった。また河西回廊からやや北に外れたエチナは、南の河西回廊と北のモンゴル高原とを結ぶ交通路と、西のハミ・トゥルファン方面と東の大同・北京方面とを結ぶ交通路の結節点であった[8]。カラホト遺跡から発見された文献には、西夏・モンゴル帝国時代のものだけでなく、遼や北宋・南宋・金朝の文献、涼州で書かれた文書などが混ざっている。その経緯は不明であるが、紙が何らかの理由で各地からカラホト遺跡に運びこまれていたことは確かである。黒河流域は貿易の利益確保のため、交通上重要な地域であったと言える。

---

4 原文は以下のとおり(下線が西夏の輸出品)。

嘉祐七（1062）年賀正旦西人、大首領祖儒嵬名聿正・副首領枢銘靳允中。祖儒・枢銘、乃西夏之官称、大者姓嵬名。聿正其所貿易八萬貫。安息香・玉・金精石之類、以估価銭却将迴、其餘硇砂・琥珀・甘草之類、雖賤亦售、盡置羅帛之旧価例太高、皆由所管内臣并行人擡壓価例、虧損遠人。其人至賀聖節、即不帯安息香之類来、只及六萬貫。

5 『金史』巻65・斡者伝・璋の条参照。

6 西夏の法典では、西夏から外国へ派遣される使節が、派遣先で私的に貿易活動を行なうことを容認している。また、中継貿易で活躍するウイグル商人を優遇する法規定も存在した。[佐藤2003]参照。

7 西夏の文化、文物については[中嶋1936][西田1997]に詳しい。両著作は西夏通史を知るうえでも有用である。

8 エチナが交通の要地であったことを扱った論考に[松田1954]がある。

（2）黒河流域の統治

西夏は黒河流域をどのように治めていたのか。その手がかりはあまり多くは残っていない。西夏側にはこの地域の支配に関する文献は非常に少ない。エチナのカラホト遺跡で見つかる文献も、西夏時代のものは12世紀後半以降の、それも仏典が中心である。隣国の北宋や遼・金朝の文献には、西夏に関する記述が残されているが、言及される地域は、隣接する寧夏・オルドス地方のものが中心であり、各国から見て遠くに位置する黒河流域にはほとんど関心が払われていない。11世紀中ごろに西夏との戦争で活躍した北宋の范仲淹の文集『范忠宣公文集』の明万暦刊本には「西夏地形図」なる地図が掲載されている。恐らく范仲淹が知り得た情報に基づき作成したとみられるが、西夏と北宋との国境付近の要塞や地名は詳しく記述されているのに対し、遠く離れた黒河流域の記述は手薄である。北宋側の歴史書『宋史』によると、李元昊時代の西夏では、「右廂甘州路（黒河流域を含む河西回廊を指すと見られる）」には三万人の兵士が配置され、「西蕃・回紇に備え」たという[9]。「西蕃」とは、祁連山脈の南、青海・チベット高原のチベット族を、「回紇」は祁連山脈やトゥルファン方面のウイグル族を指すと見られる。特に青唐（今の西寧）付近にいたチベット族は、北宋と同盟を結んで西夏を牽制し、西夏を経由せずに青海・ツァイダム盆地を通って北宋とタリム盆地とを結ぶ交通路として栄えていた[10]。同じく『宋史』によると、李元昊は全国を12の地域に分割して監軍司を設置し、豪族たちに軍を統率させたという[11]。このうち黒河流域には「甘州甘粛」「黒水鎮燕」の2つの監軍司が置かれたという。「黒水」は現在のエチナ、カラホト遺跡を指しているとみられる。

北宋側の記述は西夏側の記述とどの程度対応するのであろうか。カラホト遺跡から出土した12世紀中ごろの西夏の法典によると、粛州と黒水に監軍司が置かれていたとされている[12]。北宋側の記述と食い違いが見られるが、黒河流域を甘州および粛州といった上～中流域（今の甘粛省の領域）と、下流のエチナ地域（今の内蒙古自治区の領域）の2つに分割

---

9 『宋史』巻485・夏国伝上（下線は本文での引用部分）

元昊（中略）置十二監軍司、委豪右分統其衆。自河北至午臘蒻山七萬人、以備契丹；河南洪・白豹・安塩川・羅落・天都・惟精山等五萬人、以備環・慶・鎮戎・原州；左廂宥州路五萬人、以備鄜・延・麟・府；<u>右廂甘州路三萬人、以備西蕃・回紇</u>；賀蘭駐兵五萬・靈州五萬人・興州興慶府七萬人為鎮守、総五十餘萬。

10 なお、青唐付近は11世紀末に北宋の直接支配を受けることになり、12世紀前半の北宋滅亡後は西夏領に編入された。

11 『宋史』巻486・夏国伝下

有左右廂十二監軍司：曰左廂神勇・曰石州祥祐・曰宥州嘉寧・曰韋州静塞・曰西寿保泰、曰卓羅和南・曰右廂朝順・曰<u>甘州甘粛</u>・曰瓜州西平・曰<u>黒水鎮燕</u>・曰白馬強鎮・曰黒山威福。諸軍兵総計五十餘萬。

また、前註も参照。

12 『天盛旧改新定禁令』巻10「官司の順序と文書を送る門」・第690条「諸々の官司に長官・承旨を遣わす定数」

していたことがうかがえる。このほか、甘州には甘州城司、粛州と黒水には刺史(地方の役人を監察する役所。監軍司とセットで置かれる)と転運司（物資の輸送・調達に関係する役所）が置かれていた。

ところで、この西夏の法典には、黒水監軍司にいる家畜（恐らくは官営牧場の家畜）の検査に関する次のような条文が定められている。

一、黒水地域の中に牧人がいる場合は、道のりが遠いので、(別の）もう一種の禁令の期日に依り、家畜を検査する者を監軍習判（監軍司の四等官。定員は三人）のうちから一人を行かせ、(家畜の）検査をせよ。(検査が）終わったときには帳簿を提出する。役人の言葉（を記した）帳簿一冊を送らせ、二月一日中に都まで至らせよ。(後略）[13]

直前の条文によると、黒水以外の地域の家畜の検査は、都から派遣される群牧司の役人が実施することになっている。条文が規定通りに行われたかどうかはわからないが、黒水地域が西夏の都から遠い辺境の地と認識されていたことがうかがえる。

張掖には、漢文・チベット文合璧の石碑「黒河建橋勅碑」が現存する[14]。12 世紀後半の西夏時代に西夏皇帝の勅命により建立されたもので、黒河に架かる橋に関する内容である。碑文によると、ときの西夏皇帝は自らこの橋を訪れたことがあり、「鎮夷郡」内の「黒水河」にいる山神や水神などは皇帝の言うことを聞くように、と勅命を発している。この碑文から、西夏皇帝がこの地域の交通や黒河の治水を重視していたことを想像できるだけでなく、12 世紀後半の張掖が「鎮夷郡」と呼ばれていたことがわかる。『元史』巻 60・地理志３によると、唐代以来甘州と呼ばれていた張掖は、西夏時代に鎮夷郡と呼ばれていたとあり、両者の記述は一致している。なお、『元史』地理志では、西夏時代に甘州が「鎮夷郡」から「宣化府」に再度改められたこと、山丹には「甘粛軍」が設置されていたとあるが、西夏側の文献からは管見の限り確認することができない。

（３）黒河流域の自然条件と生業

前掲の法典の条文から、黒水が当時牧畜に適した地域であったことが想像されるが、その他の流域における自然条件や生業はどのようなものであったのか。これについては、西夏側のいくつかの文献から推測することができる。

西夏の類書（百科全書のような書物)『聖立義海』の巻２「山の名前と意味」の章には「南辺の大山」という項目があり、次のような解説が付されている[15]。

ミ（＝西夏）の国の領域はチベットと境を接している。マ（？）沢に集まり（？）草木が生い茂り、野獣が多く住み、山野は泉の水が耕作の元手になっている。

西夏領の南部の山脈であること、チベットと境を接していると説明していることから、「南辺の大山」とは、祁連山脈を中心とする甘粛・青海両省の境付近に横たわる山地のこ

---

13 『天盛旧改新定禁令』巻 19「家畜の検分・調査門」・第 1386 条「黒水の家畜の検分について」
14 録文は『隴右金石録』巻４所収。
15 克恰諾夫・李範文・羅矛昆『聖立義海研究』寧夏人民出版社，1995 年，p. 59 をもとに筆者が訳出した。

とを指しているとみて間違いない。

『聖立義海』はすぐ続けて、「南辺の大山」に属する山脈として「雪積大山」の名を挙げ、次のように説明している。

雪積大山：山は高く、夏も冬も雪が降る。雪の塊は融けないが、縁の方は融けて、南の川（南から流れてくる川。黒河を指すか？）となる。（川の）水は勢いがよく、西夏の領域では水を引いて穀物を作る。山は幅が広く長い。雪山は連綿と続いて途切れず、みな諸国につながっている。（わが国の）根源の川（？）である白高のことである。

高い山に積もった雪が融けて麓へ流れ込み、その雪融け水が農耕を支えていることを、西夏の人々は認識していたのである。

さらに続けて、「焉支上山」なる山地について、次のような説明がなされている。

焉支上山：冬も夏も雪が降り、雪の塊は夏になっても融けない。民は灌漑農耕をするが、土地は寒く、麦は九月に実る。羊や馬を養うのに利がある。（現地の人々は）馬乳酒を飲んでいる。

表記に用いられる西夏文字は異なるが、「焉支」と同じ発音の「胭脂山」という山の名前が西夏の法典の条文に残されている。条文によると、この山は「土地が良いのでヤク（を放牧する）土地である」とされている[16]。法典の条文に表記されている山の名前の西夏文字は、漢語の「胭脂」を音写するときに用いられる[17]。『聖立義海』の「焉支上山」と法典の「胭脂山」が同一のものを指すのか、断定できる根拠はないが、先に言及した『范忠宣公文集』「西夏地形図」には甘州と涼州の中間付近に「胭脂山」という地名が記されている。法典に現れる「胭脂山」と同一のものであろう。

以上のように、西夏側の文献の記述から、黒河流域を含む祁連山脈の麓では、灌漑農業や牧畜が行なわれていたことが文献上から想像できる。

3．おわりに

本稿では西夏時代の黒河流域の状況を、西夏側および隣国の北宋などの文献に残る断片的な情報をもとに復元してみた。その結果、当時の黒河流域は西夏の中継貿易を支える交通の要地であり、灌漑農業や牧畜が行なわれていたことなどを確認できた。しかしながら地名の比定や、文献記述の信憑性には疑問の残る箇所もある。特に現地の生業形態については、文献以外の調査結果を基に当時の自然環境を把握した上で総合的に検討する必要があるだろう。

西夏の法典には灌漑水路や家畜の管理に関する条文が多数定められている。またカラホト遺跡出土文献には西夏時代のエチナ地域の状況を伝える文書がわずかながら残されてい

---

16 『天盛旧改新定禁令』巻19「家畜の利益の限度門」・第1350条「数を数えて帳簿につける」第5項

17 カラホト遺跡から発見された西夏語－漢語対訳用語集『番漢合時掌中珠』では、漢語の「胭脂」に対応する西夏語が、この山の名前と同じ西夏文字で表記されている。[李範文 1994]p. 424参照。

る。こうした文献は現在いずれもロシアにあり、すでに写真版を用いた翻訳や論考もいくつか出されている[18]。しかしながら、写真版は不鮮明な箇所があるために誤読を犯す場合も少なくない。画数の多い複雑な西夏文字の場合はわずかな判読の違いによって、文意が大きく変わってしまうことが往々にしてある[19]。正確な訳出のためには、現地所蔵機関での実見調査を要する。今後の調査課題としたい。

参考文献（ＡＢＣ順）

陳　炳応

1991　「西夏的絲路貿易与銭幣法」『中国銭幣』1991-3, pp. 27-35.

岩崎　力

1990　「西夏建国とタングート諸部族」『(中央大学) アジア史研究』14, pp.1-43.

2000　「隋唐時代のタングートについて—西夏建国前史の再検討（一）—」中央大学人文科学研究所編『アジア史における法と国家』中央大学出版部, pp. 101-165.

2002　「夏州定難軍節度使の建置と前後の政情—西夏建国前史の再検討（二）—」『中央大学アジア史研究』26, pp. 67-92.

Kycanov, E. I.

1971　"A Tangut Document of 1224 from Khara-Khoto." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 24-2, pp. 189-201.

李　範文

1994　『宋代西北方音』北京, 中国社会科学出版社.

李　蔚

1985　「試論西夏立国長久的原因」『寧夏社会科学』1985-3, pp.60-64.（『西夏史研究』銀川, 寧夏人民出版社, 1989, pp. 43-53 に再録）

松田　壽男

1954　「東西交通史に於ける居延についての考」『東方学論集』1, pp. 1-25.（『松田壽男著作集』4, 六興出版, 1987, pp. 37-67 再録）

宮崎　市定

1935　「宋と遼・西夏との関係」『世界文化史大系　宋元時代』誠文堂新光社.（『宮崎市定全集』7, 岩波書店, 1992, pp. 3-22 再録）

長澤　和俊

1957　「遼の西北路経営について」『史学雑誌』66-8, pp. 67-83.（長澤 1979, pp.305-332 再録）

1963　「西夏の河西進出と東西交通」『東方学』26, pp. 56-77.（長澤 1979, pp. 349-

---

[18] カラホト遺跡からは、西夏滅亡直前に現地の役人が上官に宛てて書いたとみられる西夏語の手紙が発見されている。すでに［Kycanov1971］［聶 2000］が文書を解読し、論考を発表しているが、その訳出にはまだ再考の余地が残されている。

[19] [佐藤 2003]では、写真版からの訳出の危険性について具体例を挙げて指摘している。

378 再録）

1975　「五代・宋初における河西地方の中継交易」『東西文化交流史』雄山閣,pp. 109-119.（長澤 1979, pp. 291-304 再録）

1979　『シルク・ロード史研究』国書刊行会.

中嶋　敏

1936　「西夏に於ける政局の推移と文化」『東方学報（東京）』6, pp. 713-742.（『東洋史学論集—宋代史研究とその周辺—』汲古書院, 1988, pp. 399-423 再録）

聶　鴻音

2000　「関於黒水城的両件西夏文書」『中華文史論叢』63, pp. 133-146.

西田　龍雄

1997　『西夏王国の言語と文化』岩波書店.

岡崎　精郎

1972　『タングート古代史研究』東洋史研究会.

佐藤　貴保

2003　「西夏法典貿易関連条文訳註」『シルクロードと世界史』大阪大学大学院文学研究科, pp. 197-255.